

は郷里にをる弟鳥啄子の机辺にある筈である。それからその茶道具は寒燈句会を私の処で催すたび席上に持ち出されるのがそれである。

(大正6年・曲水1—7)

猫の主

郷里の家の垣ぞいに二間ばかりの川が流れてゐる。ぢき川上にある湯屋ではもとはこの川の水で湯をたてたといふ位、城の壕から湧出てくる川水は澄みきつてゐる。毎年夏になると、川下の杭の蔭や藻の根で孵った諸子魚や小鮒は、冷たいお壕の水がのみたさに、小さい尾鰭を列べて盛んに登る。そうなる待構へてゐた近所の子供は手に手にぶつたいを持って、家の角の橋に押寄せて来る。ぶつたいを水に沈めて流れないやうに柄を橋裏の横木へあて、置いて、橋の上に待つて居て時々ぶつたいを上げて見ればいゝのである。幼い子供にでも指一本濡さないで雑魚が捕れる、然し川幅に限りがあるので自然この橋の上に小さい漁場の争ひが始まる。中には夜の三時頃から出掛けて来て一番流れの工合のいゝ所を占めてゐる奴もあるし、腕力にまかせて毎日の自分の漁場をこゝと決めて仕舞ふ乱暴者もでてくる。その中に毎日欠かさず来てゐる十四五の姉妹らしい二人の娘があつた。

二人は乱暴な男の中に交つて、いつも自分達の場所を失ふこともなく、橋の上に出るたび私が覗いて見ると小さなバケツの

中の獲物は誰のよりもきつと多かつた。此の二人の後にいつも蹲まつて二人に何か、か注意を与へてゐる四十格好の男があつた。その疎髻をはやした、くたくたの浴衣を胸あらはに著た男は二人の父らしかつた。或日ふとその男と顔が会つた時、彼は突然、

「毎日お喧しいでせう」

と私に言つた。それからこの男は私をとらへて色々な事を話した。「戦争へ行つた者の行賞に將校を重くして兵卒を軽くしてゐるのは大いに間違つてゐる。將校は戦争に出るのが職業で、平常はその職業の見習ひだ。我々が会社へ務めて働くのちつとも違ひはしない、処が戦争にゆく兵隊の方はなかなかそんなもんぢやあない」などといふかと思ふと「君方はマッチ一箱には何本のマッチが入つてゐるか知つてゐますか」といふ、私はこの突飛な質問に面喰つてゐると、「箱の大きさにも色々あるが、まあ普通のだつたら平均六十八本と見ればいい、そこでこれを価格の方から見ると僅かなマッチ一本は今のところ白米三十粒と同価格のものだ、しかし人間は一粒でも米となると捨てるのが勿体ないといふがマッチ二本や三本捨てたとて平気だ、現金なものだ」といつて煙草をとりだして、二三本マッチをパツパツとすつてつけてハツハツと笑つた。こんな事を熱心に話してゐながらも、娘達の殺生の事は片時も忘れないといふ風に、時々「おい、もう上げてもいいぞ」と注意してぶつたいを上げさせるのを怠たらなかつた。私は余程妙な人だと考へた。

「やっぱり、捕れた魚はお焼きにでもなさいますか」と聞い